

あの頃のこと―「謎の人」の回顧録―

入学して、いきなり4年間のドロップアウト。これはもう大学なんてところは私には合っていない。さっさとけじめをつけてやめてしまおうと学生部に赴いたところが、あと一年ある（休学期間が一年あるため）からがんばってみなさいと説得される。私を説得してくださった事務官がどなたであるのか、それどころか女性であったのか男性であったのか、不義理な私はそれさえも覚えていない。ともあれ説得に応じてしまった私は、2年分の語学の単位を1年間で修得せねばならなくなった。英語はともかくとして、第二外国語としてとったドイツ語については、グラマーをいちから教わりながらリーダーの授業も受けねばならない。小・中・高等学校を通じて、とても優等生といえるような学生ではなかったけれど、あれほどまでに劣等生気分を味わったこともいままではなかったかと思う。し



かし専門課程になんとかあがらなければという意識よりも、いま手にしている文章が読めないがゆえに教官からぶちぶちいわれる悔しさから、私はほぼ授業を無視しグラマーの学習を勝手に進めていった。しかし、成果というものは出るものなのである。はじめは火星語とでもしか思えなかったドイツ語が、どんどん読めるようになってゆく。これは私にとってはまさに、「学ぶ」ということの楽しさを発見する過程であった。このような事情は、今から思えば専門の講義を受けるようになって、とりわけ学問的な問題について、先生のいうことを聞かないという不埒かつ厄介な地理学徒となってしまった理由のひとつでもあったと考えられる。いずれにせよかの1年間は、その後の私の進路を決定するにあたって決定的に重要な1年であった。なにはともあれ、かくして「謎の人」は地理学教室に姿をあらわすのである。

その後の学部生としての2年間、以前は大学というものをなめきっていた私にとっては、様々なことが新鮮であった。各地への巡検や、校舎の屋上から眺めるPL教団の花火大会。特に今でも覚えているのは、たしか4回生のときの銀杏祭であったかと思うが、教室でラーメン屋を出店したときのことである。中華料理屋でバイトする学友が麺を仕入れ、生協を通じてどこか寸胴なべを借り、自分の部屋でスープと焼き豚を作った。飼い猫から鶏ガラを死守するのに苦勞し大変な作業ではあったが、なかなかの好評であり、銀杏祭の歴史に記されるべき模擬店ではなかったかと今でも自負している。またけったいにも迷惑なことであったであろうことは、「先輩」たちとの関係である。私にとっては「先輩」は「先輩」である。しかしむこうにとってはかなり年上の「後輩」に対し、どういう態度でのぞんだものかさぞやもてあましたに違いない。学習面についても先生方にはどう思われていたか存じ上げないが、専門過程に上がる前の1年間の勢いもあり、かなり懸命に勉強したと思う。地理学の何たるかなどまだわかっていかなかったが、ただ食欲に本を読みあさった。しかし同時にそれは私にとっては、生意気にも日本の地理学の限界を感じさせられる過程でもあった。特に卒業論文を書くに

あたって私が関心を寄せていた事態、たとえばホームレスに対する排除や都市における支配—監視 surveillance の問題（むろんそのころはそんなむずかしい言葉で考えてはいなかったが）について参考にするべき業績が、当時まだ日本の地理学界においてはほとんど見当たらなかった。学部時代の2年間で語学以外の教養および専門課程の単位をそろえ、おまけに卒論も書かねばならなかったために、就職活動などで頭になかったということが、私を大学院に進学しようと思わしめたことはたしかである。しかし学ぶことの楽しさに味をしめてしまったことと、それゆえに気にかかって仕方がない現実の事態を、地理学というものの見かたからどうしても読み解いていきたいという思いをもっていたこともまたその理由のひとつである。そういうわけで私は進学を志したのだが、稚拙でつたなく、とてもじゃないが地理学の論文とは思ってもらえないような卒論（アンリ・ルフェーブルの議論を地理学的諸問題に援用することを試みたものである。今でこそ彼の業績は、ハーヴェイ、ソジャラによる紹介によって、日本においても地理学者のみならず、多くの社会学者によって再評価されるころのものとなったが、当時はまだ「過去の人」でしかなかった。そういう意味では、学部生の分際で彼に注目した私の「先見の明」については、私は傲慢にも自分で勝手に評価している）を書いた私をとっていただいた先生方の「教育的配慮」にはつくづく感謝せねばならない。

かくして私は大学院に進学したわけだが、それ以降も私は様々に恵まれた研究環境におかれたことに感謝している。思い起こすことは多々あるが、なかんずくここに記しておきたいことは、同時に他大学から進学してきたふたりの優れた「先輩」、大城直樹氏（現在神戸大学）、吉田容子氏（現在摂南大学）の存在である。私が進学した当時、本教室の大学院には修士過程に私が一人、博士過程には彼/彼女のみという、いわば新入生しかいないという状況であった。このふたりの「先輩」も私と同世代、正確にいえばひとつ年下であったわけだが、ほとんど最初からわけへだてなく授業もともに受け、タメ口をきける関係であったように思う。研究者として育ってゆくなかで、彼/彼女から受けた刺激は今までの自らの研究を省みても看過しえぬものである。またくちはばったい言い方を許していただけるならば、生涯を通じて切磋琢磨しあえるかけがえのない友人と出会えた幸運にひしひしと感謝している。現在でも大城氏とは科研における研究分担者として、吉田氏とはフェミニスト地理学にかかわる研究会を通じて交流を続けている。

ともあれ、学部生・院生時代を通じて13年間も市大にお世話になったわけだが、こうして思い返してみるとつくづく幸せな学生生活に恵まれたものだ、地理学教室に対する感謝の気持ちにたえない。そして今こうして、一度は大学をやめようとしたような輩が大学教官などという職に就いているのもけったいな話ではある。しかしドロップアウトしていたあの4年という時間がなければ、おそらく私はまた異なった人生を歩んでいたことであろう。それと私を無理やり説得していただいた事務官の方…。一度はお会いして、感謝の言葉を述べねばならないと思っている。

（平成元年卒業・平成3年修了）